



TITLE:

南米日食観測行(1): 桑港より

AUTHOR(S):

---

CITATION:

南米日食観測行(1): 桑港より. 天界 1937, 17(195): 336-340

ISSUE DATE:

1937-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167490>

RIGHT:

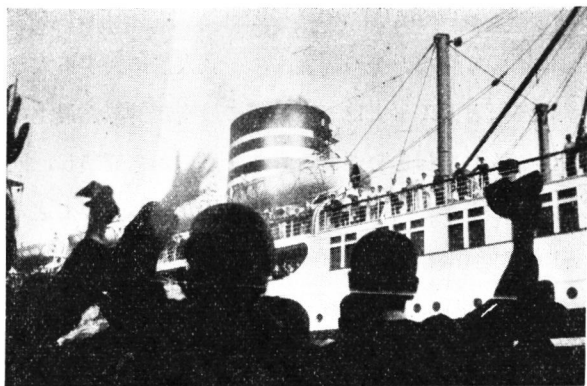
## 南米日食観測行 (1)

〔桑 港 よ り〕

### ① 北太平洋を行くもの

寝ては水、覺めては水の太平洋、送るも涙、送られるも涙。去る4月6日、横濱岸壁を揺がす歡呼の聲に送られて（とは云ふものの山本教授夫人を加へて10人餘りの人の聲）雄々しくも故郷を後に船出した我等の一行、たつた2人は、やがて来るであらう未だ見ぬ異國の戦ひを夢に畫いて、航程萬里、波を分け、先づ北太平洋へと泳ぎ出したのである。折しも暮色迫る横濱の西空に一點燦然と輝くは此れ宵の明星、あるともなき風に誘はれてヒラヒラ舞ひかゝるは其れ一輪の櫻花、嗚呼、勇ましき哉!!

観測隊長山本博士の出發



雲か山か哭か越か、水天髣髴青一髮、大圈コースを胸に畫きつゝ舵を東に4500海里。陽々たる日の光は船首に碎くる波に煌らめき、燦々と降り注ぐ星の光は、マストの上に高く輝く、實に美はしきは北太平洋の青空かな。——やがて起る一陣の嵐。其の進む所、昨日は風、今日は雨、遙か左舷にアリユーションをも望めば、俄かに襲ひ來る風雪に、内地の櫻花もあらばこそ、丈餘の波を乗り越え押し切り、雄々しくも打ち進むは、此れぞ我等の商船テナシテイ——それは1920年型の貨物船“Norway Maru”，總噸數5832.48噸、石炭も燃くし油も燃く、極く調法な黒船ではある。翻つて、つらつら居睡む

るに、今を去る77年前萬延元年の春つ方、時の軍艦咸臨丸が數ヶ月を費して初めて桑港航路を乗切つた話はさて置き、今では何處かの優秀船が僅かに10日と2、3日でボンと飛び行く世の中とは相成つた。さもあらばあれ、善美を盡した船室と食堂とラウンジとデツキとダンスホールとプールとそして幾多の紳士淑女とを乗せて、毎時20何海里かのフル・スピードで颯爽と波を切つて進む姿は、まあ、なんと云ふ楽しい光景でせう。——あゝそれなのに、それなのに!!——石炭と油とに融通はきいても、我が商船テナンティ1は毎時11哩のフル・スピードで、實に19晝夜の間、波と鬨ひ水を押し除け、エンジンの響も春の空に、勇しくも悠々と航海して居るのであつた。やがて太平洋が鼻につき、故國を離れて數年とも思はれる頃、待てば海路の日和とやら、4月14日が2度重つて、北緯 48° 迄北上して、やつと本日 (4月24日) 土の香、戀しい桑港へと着いたのである。20日に及ぶ其の航海中、毎日船橋の報時を受ける事と、英語と西班牙語の會話をチャンボンにつめ込む事と、何かにつけて天文の事を考へる事以外、食ふ事と飲む事と、駄辯る事と寝るより外、天は何物をも我々に與へて呉れなかつた。併し1日、機關室を見物したり、操舵室にぼんやりしたり、Officer 達よりアチラの話を聞いたり、たゞ一度機關長の鐵砲を借り出して、<sup>アホ1ドワ</sup>信天翁を狙つて、たつた2回ズドンズドンとぶつ放なして、此の上ない海上のスリルを味ひ得た事とは (但し2回とも的是は見事に外れた)、北太平洋のある限り、とこしへに燃きついて消えない印象とはなるであらう。

今我々の目前には、深い睡りから漸く覺めたサンフランシスコの街が、低く垂れこめた朝霧の上にボカリボカリと浮んで見える。

さらば、北太平洋よ！ そしてそれを横ぎるものよ！ 暫しのお別れだ。又、歸る日まで “Adios!”。(Σ 生)

## ② 信 天 翁

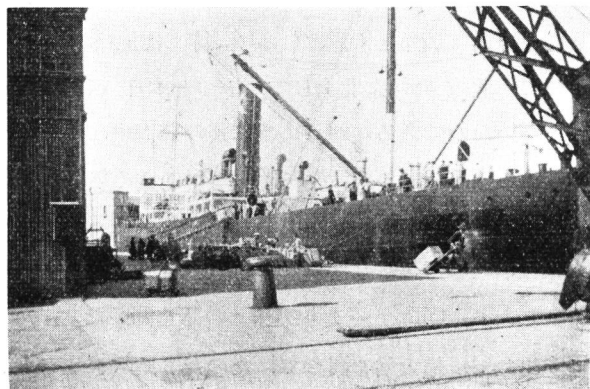
船室から便所から浴場から見る丸い三つの景色が同一のものである。北緯 48° を船は東に結びつけられて居る。一つの週期を海と空が交代して受けもつ重苦しい層雲に黒い潮が一せいに嘯みつきかゝる。昨日も今日も4月の14

日である。東と西の相會ふところ。

最初私は可なり頑固に此の海の振幅に抵抗したものである。私の足はイツカナ大地のカタサから離れないのだつた。それだけにその期間と云ふもの我と我身を苦しめなければならなかつた。投げ上げられたベッドの中で二つの自然法則に身を狭まれてホゾを噛む私。

それなのに或朝以外にも船に乗つて居る自分を私は見出したのだ。そしてカ１テンやカレンダー１やオ１ヴァーに８度を拮抗して紅茶をすゝつて居る私だつた。新しい此の小ちやい社會法則がイツの間か私の細胞に滲透し入つて

観測器械の積込み



居たのだろうか。私達は寝て食べてそして寝て又食事の鐘で食堂へ行く。其處で「あゝそれなのに」のレコードを覚える。

今私達は決してペルーへ日食観測に行くのではない。又南米への旅でもない筈である。艤て舵が南に執られペルーの岸を見出すであらう。而し昨日の生活も明日の生活も私達には此の浮浪世帯のカレンダーでこそ來たり過ぎる。何うやら今は地上の總ての感情や知性を遠い經度の彼方に忘却してしまつたのかも知れない。

機關長が1日私達を誘つて船尾へ連れて行つた。「アレが信天翁です。一つうつて御覽なさい。」數羽の黒い影が不格恰な大き過ぎる翼を翻して私達の船に従ひ來る。恐らく折々の船よりの排泄物を求めて此の太洋の曲率を何處迄も渡り行くのだらう。見るからに呂鈍なミキイ生物の姿が潮風に浮動し

て居る。太い短い嘴が軋る様な悲叫を聞かせる。緩慢な弧を切つて船尾の白い浪にスレスレと身を投げる。『コイツ等は1匹が射落とされると皆で其の死體を食ひ合ふのです。そして又此の船を追つてくるでせう。』私はしばし此の世にもブザマな何もかもから距てられたアホ1鳥を目の前に銃を執ることを躊躇する。此の生物には50米の着弾距離ではバラ弾は大して傷つけ得ぬと云ふ。靜に銃を上げる。知るや知らずや彼等は悠々と船尾をカスリ又ひらりと波を縫ふ。1羽がグツと大圓を割つて私達の距離に反轉する。私の照準が微かに震えつつ此の馬鹿野郎を追ふ。(ホリ平生)

### ③ カリフォルニアの空は青い

フラリフラリと歩いて居る間に“Ocean Beach”に出た。昨日未明にサンフランシスコの波止場にホウリ出されてから丸1日半と云ふもの、足の向く方角を恵方と決めて、初めて踏んだ外國のペーブルメントの上を、右に左に彷徨ひ歩けば、そろそろ旅の衰れを感じる。今にも崩れて來さうな、高い大きな建物が兩側より魔物の如く蔽ひかぶさる横町は、日の蔭が大きく地に落ちて、晝間尙風寒く、垣間見るカリフォルニアの空は眩い程青い。サンフランシスコの2日間は全く雲を忘れた快晴続きだつた。私は横町の舗道に立つて晝間星を見んものと幾度か空を仰いだ。自働車が馬鹿に多い。まして郊外へ出れば道をコトコト歩いて居るものは大抵我々2人切りである。日本では至極輕便なタキシも、此處では目から鼻へつき抜ける程高いので、我々に與へられた唯一の交通機關は結局市内電車のみとなる。私達は3秒間に1臺づゝの割合で追ひ越して行きやがる、様々の型の自働車を横目で睨みながらやけに歩いた。太平洋の波がシスコの街を噛む所に“Ocean Beach”があり“Seal Rock”がある。我々は“Golden Gate Park”を通つて、兎に角無事に此處迄たどりついた事を、神に感謝しながら、今日一日、濱を楽しまんとする彼等に伍して潮風に帽子を氣にしながら、濱に沿つた10數哩のだゞ広いドライブ道をフラリフラリと歩いて行つた。くつきりと丸い弧を畫いた水平線には雲一つ見えない。足下遙か彼方に眞砂に打ち寄す其の波は日本の岸も打つと思へば、何だか水平線の彼方に富士山が見える様な氣がする。カリフォルニ

アの空はあく迄青い。やゝ西に傾いた夕日が海に反射して眩しく輝き、思はず眼を轉じて振り返れば、遙か後には小高い丘が澄み渡つた青空をくつきりと區切つて其の峯に、其の中腹に轉々とシスコの郊外の建物が、白く青く黄に縁に夕日を受けて繪の如く見える。カリフォルニアの空は依然として青い。京都の空を5, 6回蒸溜した様な此の美しい空の下に、リクやキルソン山の天文臺がある事は我々として誠に結構な事であり、同時に極端にうらやましくもなる。我は此のカリフォルニアの上陸第一歩に、たまたま此の美しい空を2日續いて見せつけられたので、殊の外胸糞が悪るかつた。

(サンフランシスコにて  $\Sigma$  生)

### ペル日食観測隊より快報!!

ペル日食観測隊長山本博士より下記の如き電報を受け取つた。(ペル發8日20時58分(ペル時間), 9日13時30分受信)

Eclipse successfully observed perfect sky 13 photographs and 50 meters cinematographs obtained bright corona maximum type Yamamoto.

快晴。日食観測ハ成功セリ。コロナハ明ルク(黒點)極大型ヲ呈シ、寫眞13枚、活動寫眞50米撮影セリ。山本

〔花山急報第254號〕

### 天の南極を知る法

ペル1國アレキパの Fernando L. De Romana 氏は天の南極を知る法として、シリウスとカノプスを結び、それを更に兩星間の距離丈け延ばした所が南極であり、シリウスの代りに大犬座  $\beta$  星にすれば一層正確であると。